

識字の世界とオラルの世界における思考様式の相違

—読者は旅人—

A Study of the Difference of Thoughtways between Literally Based Culture and Orally Rooted Culture:

Is a Reader a Traveler?

中西 満貴典

NAKANISHI Mikinori

Abstract

This paper deals with a comparatively abstract thesis of thoughtways: literate culture vs oral culture; “scientific” thinking vs “non-scientific” thinking which we imagine might be superior in reasoning. To our modern eyes, it seems that we have a tendency to rely on a so-called scientific way of thinking so as to seek “truth” from facts. Our standing point of this study, however, is guided by the idea that we might not recognize the superiority and flexibility in “rational” thinking which would stem from an oral way of expressing and thinking. We attempt to shine a glaring light on an oral mode of thinking, referring to selected texts such as Michel de Certeau, Ivan Illich, Walter J. Ong, Mikhail Mikhailovich Bakhtin which would focus on an issue about how to read: loud reading or silent reading.

Keywords: 思考様式 科学的思考 撞着的概念結合 空間と時間 夢思想 書物崇拜 オラルの世界の豊饒性

はじめに

われわれが、いま取り組もうとしている主題は、大きく言って思考様式にかかわるものである。現代における、われわれの思考のしかたは、一般的に、「論理的」「客観的」「科学的」などといった形容句によってあらわされる思考プロセスが、このう えなく正しいものとされている。また、原因があって結果があるとする「因果律」にもとづいた思考や、人間を精神と身体に分離してとらえたり（その他、主体／客体と分節したり）する二分法による思考を基盤とした（文化）生活をおくっている。われわれの関心は、そのような思考スタイルを、文明のすすんだ産物として固定的にみなすのではなくて、むしろ近代特有の思考の様式を成り立たせている条件や、そのような思考を可能にする（歴史的、社会的）状況に向けられている。たとえば、昨今、しばしば耳にする、「科学的な（に）・・・」といった言説は、どのような社会的文脈において生み出されているのか、という問題に関心が向けられることになる。ここで、念頭においているのは、「科学的」という概念を構成している「科学」という思想が、実際、どのような歴史的な文脈のなかで生まれ、それが、自然や事物の認識、さらには人間の営為に対する評価

に大きく影響をおよぼしていったのかについて、われわれは十分に吟味しないまま、その種の用語を使っていることになってしまっていないだろうか。別の言い方をすれば、「科学的」「客観的」、あるいは「論理的」という言葉の使用によって、われわれの思考は、ある特有の特徴をもつにいたっているのではないか—あるいは、そのような用語が飛び交う言説世界のなかで、われわれの思考空間は限定的な状態に留め置かれていないか—という問い、でさえ立ち上がってくるといえる。

このような問題意識のもとに、本稿では、つぎのような具体的な問いを立てることにする。現代において、「知」の現場では、「科学的」と形容される認識・推論方式が主流になっているという状況は否めない。そのような環境のもとでは、「科学的に」説明ができない事象を、あえて言葉を用いて記述されたものに対しては、「非科学的」という烙印を押されるのが常である。この習慣は、中世のいわゆる魔術的な世界から、われわれは脱却している、ということの言明のようにも響いている。（科学／魔術の図式が、われわれの意識のなかに埋め込まれているといえるのである。）本稿でのこころみは、科学的な思考を後景化して、魔術的世界を前景化する（あるいは魔法なるものを呼び起こす）

ものではない。むしろ、「科学的」という言葉の本質を探るためには、相対化されている反対概念の魔術なるものに、どうしてもふれなければならないという考えに拠っている。しかし、中世における自然魔術の思想と科学革命にいたる道すじを論じる技量は、われわれにはとうてい持ち合わせていないゆえ、別の角度から、この対比についてアプローチしてみたい。すなわち、科学／魔術の分節を、ここでは、つぎのふたつのジャンルにおいて読み替えることをこころみる。ひとつは、「文字の文化／声の文化」という、コミュニケーション・メディアの相違に着目する観点である。文字の発明、グーテンベルクによる活版印刷術の発明などによる、情報媒体の変容において、人びとの表現のしかたや、それにとまう思考様式の移り変わりがあった、という前提での対比である。

もうひとつの読み替え—科学／魔術の対立図式の、異ジャンルにおける対立図式への読み替え—は、一見して、対立したり、矛盾したりしている概念や事象に対して、どのように向き合うのか、という思考・推論の方式にかんするものである。ここで取り上げるのは、矛盾が並べ置かれる状態をゆるさない思考様式—AとBとの対立をCへと還元していく弁証法的思考—を、片方の側にすえる（現代のわれわれの思考様式に近いとみる）。それに対して、矛盾なるものを並置したままにしておくことをあえて行う様式を、もう一方の側にすえてみる。つまり、「矛盾並置をゆるさない思考様式／矛盾並置をゆるす思考様式」という対立図式を設定し、前項を「科学」、後項を「(自然) 魔術」に相応するものとしてとらえてみる。このように、科学／魔術の対比を、二つの軸—文化を「文字／声」による区分と、矛盾について「並置不可／並置可」による区分—に置きかえて（読み替えて）、それぞれの言説そのものを検討していく作業を行っていく。ここで、本稿における、われわれの見たてについてふれておきたい。二つの二項対立図式のそれぞれの、前項どうしと後項どうしが、ジャンルを超えて密接に関連し合っているのではないかと、という仮説を提示したい。とくに、後ろの項のつながりについて議論をすすめる、前景化することをこころみる。それは、声の文化やオラルの世界における表現形式・思考様式と、矛盾並置をゆるす（あえて意図的に、対立・矛盾を並べ置く）ことによる推論方式（思考様式）とが、きわめて親和性のある関係であるのではないかと、という直観にもとづいている。そのような検討を通じて、オラルの世界における表現のされかたが、われわれにはなじみのないものと思われても、思考様式自体が、けっして劣ったものではないこと（あるいは、前近代的な思考様式ではないこと）、否、むしろ、そのような思考の在りかたは、すぐれていることを見出したいと考えている。もし、そうであるならば、文明は、声の文化から文字の文化へと「発展」していった、われわれは、文字・識字による、文明化された世界に生きている、という前提が覆されることになる。（した

がって、本稿では、潜在化された科学／魔術の分節における「科学」の優位性に対して反省的になることが、つねにうながされる。）

以上の見取り図をもとに、全体の企てを示したのち、本稿の位置づけを明らかにしておきたい。中心的なテーマとして、先述したように、オラルの世界の表現形式や思考様式が、矛盾並置を旨とする推論方式と、いかに密接に関連し合っているかを論証—論証というよりは、むしろ議論の連鎖に近い—することである。この論題に取りくむために、ある種特有の方法論上の戦略をとることになる。本論文で掲げる主要な問いに対して、いくつかの観点から光を当てることによって、問い自体の本質を明るみにしようとする実践である。具体的には、七つの種類の異なるジャンル—①写本時代における書物への読者の接し方について、②場違いなもの言いを旨とする撞着的概念結合の世界について、③空間および時間の概念について、④夢の機構について、⑤いわゆる三段論法とは異なる推論方式（ユダヤ的発想）について、⑥書かれた言葉に対する不信および書物崇拜について、⑦豊饒なるオラルの世界の思考について—の各言説のテキストを引いて検討を行うという方法をとる。比喩的にいえば、中心論題に対して、異なるジャンルの論題をモザイク状に配置したのち、どのような景色が浮かび上がってくるのか、を試す実験のようなものである。これら七つの小論題には、中心論題に関連しそうなテーマがそれぞれ含まれている。また、七つの小論題どうしが互いに関連し合う可能性も内包されている。つまり、中心テーマをめぐって、各論題にかんするテキストとテキストとのあいだの間テキスト性—テキスト（書かれた言葉）を介在しているものの、すぐれて対話的であると考えられる概念—の世界がひろがってくるものと予期される。

さて、本稿では、①写本時代（とくに12世紀を中心にしぼって）における書物への接し方について、をあつかうことにする。この論題を縮約すれば、「読者は旅人」と言いかえられ得る（ここでいう「旅人」はオラルの世界の特性を体現した姿であると考えられる）。この主題をめぐる、われわれのアプローチは、四人の著作者の論考（テキスト）を検討する、という立場をとる。具体的には、ミシェル・ド・セルトー（『日常実践のポイエティック』）、イヴァン・イリイチ（『テキストのぶどう畑で』）、ヴァルター・J・オング（『声の文化と文字の文化』）、ミハイル・M・バフチン（『ドストエフスキーの詩学』）の各テキストを引いて、中心的論題との関連性といった観点から、テキスト解釈をこころみる。各論者（フランス、オーストリア、米国、ロシアの出身）の著作のテーマは、それぞれ異なった領域の問題系をあつかったものではあるが、われわれが選んだテキスト—この「選ぶ」という行為自体が、ある種の読み、解釈の産物でもある—を、さまざまな箇所配置してみることにする（戦略があるようでない、ある意味では恣意性にみちた行為）。ずいぶん

識字の世界とオラルの世界における思考様式の相違

長い前口上になってしまったが、以後、「読者は旅人」「反芻する牛」「飼料／建築材料」「多弁的なオラルの世界」「オラルの世界＝声による思考」「地図型思考／順路型思考」「書物＝＜冒頭句＞を表玄関にかかげた回廊」「読むという活動＝目の旅」「読書：旅／観光客の行動」「推敲（文字）／言いつくろい（声）」「反アフォリズム的なオラルの世界」というように、まさに、モザイク状にテーマを掲げて、順々にテキスト・解釈を提示していくことにする。

読者は旅人

初めに「読者は旅人」というテーマにしたがって話を進めていきたい。参照するテキストは、ミシェル・セルトーの『日常実践のポイエティック』である（pp. 340-341、下線は中西による）。ここで示す引用は、ロジェ・シャルチエ著『書物の秩序』の冒頭の「ミシェル・ド・セルトーを偲んで」において、示されたテキストである。

作家たちは固有の場の創業者であり、古来からの勤労を引き継いで言語という土壌を耕す後継者であり、井戸を掘り家を建てるものたちだが、そんな作家たちからはるかに遠く、読者たちは旅人である。他者の土地を駆けめぐるかれらは、自分が書いたのではない領野で密猟をはたらく遊牧民であり、エジプトの財をかっぱらっては好きなように楽しむのだ。エクリチュールは蓄積し、ものを貯蔵し、場所を確立することによって時間にあらがい、生産性という拡張主義によって生産の増大をはかろうとする。読むことは時間の摩滅から身をまもろうとせず（ひとはわれを忘れ、読んだものを忘れる）、自分の獲得したものを保存しないし、保存したところでいいかげんで、それが通り過ぎてゆく場はひとつひとつが失楽園のくりかえしなのだ。

事実、読むことは場所をもたない。バルトはスタンダーのテキストのなかでブルーストを読む。テレビの視聴者は報道番組を見ながら、両面に自分の幼年時代の一コマを読む。前の晩に観たテレビ番組のことを、こんなふうと言う女性がいる、「くだらなかったけど、それでも観ていたの」と。いったい彼女はどんな場所にとらえられていたのだろう。いったいどこの場所の映像をみて、しかもその場所は、ここかあそこ、この場所か別の場所か、ではなくて、ここでもあそこでもなく、同時に内部であり外部であって、二つをひとつにしながらいずれをも失い、横たわるさまざまなテキストを結びつけてゆくのだ。自分が目覚めさせ、そこに招かれた客でありつつ、けっして所有者ではないテキストの数々を。そのことをとおして読者はそれぞれのテク

ストに特有の掟をかわし、同様に社会階層の掟をかわしているのである。

「作家たちは固有の場の創業者であり、…」のくだりにおける〈固有の場〉という概念について考えていなければならない。「作家」と「読者」との対比において、作家は「固有の場の創業者」であって、読者は「旅人」とであるとされる。この図式にしたがって比較対照していくと、「固有の場の創業者」である作家のいとなみによって、エクリチュール（書かれたもの）が次第に蓄積されていく一方で、「旅人」である読者は他者の土地、すなわち固有の場であり、エクリチュールの場であり、そのうえを駆けめぐるのである。作家は勤勉にものを貯蔵（作品を生みだし）、片や、読者は、与えられた場所において自分にとって役に立つものを採るといふ、まさに密猟をはたらく遊牧民であるといえよう。また、場所と時間の対比をすれば、「固有の場の創業者」である作家は、場所を確立することにもっぱら従事し、時間の関数からまぬがれている。

他方、読者は、作家とは反対に、場所を有することなく、ここでもあそこでもないという位相、いいかえれば同時に、内部であり外部であるような不安定ではあるが自由なポジションにしていることになる。「テキストに特有の掟をかわし、同様に社会階層の掟をかわしているのである。」における、「テキストに特有の掟」とは、文法、あるいは常識的な読み方（意味の取りかた）などに相当する概念を増す。それは、いわば無意識における「掟」であり、言明されてはいないけれども、それに従わなければならないルールである。それは、ある程度の特定の意味をとることをしむけるはたらきをする。したがって、「掟をかわす」とは、そのような縛りをみずから解放放つて、自分自身特有の読み方をする行為であるといえる。ことばの決まりから逸脱して、通常の言い方をくずしたり、ことば遊びをしたりする。「固有の場の創業者」である作家たちは、読者がそのような動きをすることを想定していない。それに対して、「旅人」である読者は、作家の作りあげたテキストである「他者の土地」を自由に「駆けめぐる」（自分特有の読みをおこなう）のである。まさに、「密猟をはたらく遊牧民」のごとく、読者は他者（作家）の固有の場（テキスト）のなかに潜んでいる宝をさがして、自分のものにしてしまうのである。

遊牧民は、自分の固有の場所をもたず、つねに、生活のための良い条件の地を求めて移動している。自分にとっての固有の場所という資源がない代わりに、時機（好機）をうかがい、チャンスに敏感であり、時間を有利にはたらかせて外の力を自分のものにしようとする。このような「テキストの掟をかわす」といふことは、「社会階層の掟をかわす」ことにも通じている。テキストの掟とは、ラングや文法のような言語を使ううえでの無

意識下における、ある種の制約であり、他方、社会階層の掟は、社会のルール、規律、倫理、上下関係（ヒエラルキー）を指しており、両者の「掟」のなかに照応関係が見出される。ことばのルールと社会のルールとのあいだに、類比がみられるのである。したがって、ことばのルールに従わないということは、社会のルールに従わないということでもある。それは、ルールにまったく従わないという意味ではなく、基本的には従いつつ（従うふりをする？）、こっそり、ルールから逸脱して、自分の思うように改編して使ってみることである。たとえば、会社（「作家」の位置にある）の従業員（「読者」の位置にある）が、会社の就業規則に従って働きながら、会社の有する資源の諸々のものを、利用することもできることを指す。ときには、上下（主従）関係を転倒させることもありうる。管理されているはずの平社員の方が、上司よりも自由に動き回り得るというように、支配されているように思われるけれども、じつは、自分の思うようにしていくような状況である。このような発想、つまり、固定観念から抜け出した自由な発想が、「読む」という実践にもあらわれるのである。それは、与えられた読み方、期待された読み方ではなく、自分の好きな読み方である。「バルトはスタンダールのテキストのなかでプルーストを読む」の引用部が示唆していることは、常識的には、「バルトはスタンダールのテキストのなかでスタンダールの意図を読む」という読み方そのものの反転である。つまり、期待されている読みではなく、別の読みの実践があるということである。そのような「読み方」を報道番組における場面において適用すれば、「テレビの視聴者は報道番組を見ながら、画面に自分の幼年時代の一コマを読む」ことがいえるのである。元来、報道番組には、制作者（「固有の場の創作者」）側に、番組に込めた意図（「固有の場」）があるが、番組の送り手の意志とはまったくかけはなれた、ある一個人の視聴者自身の、過去に体験したことの記憶を想起させるような、テレビ画面の見方（読み方）がなされることもありうるのである。そのようなことは、大学における授業も同様に起こりうる。授業において、教員（「固有の場の創作者」）が、説明の際に用いた図や絵、写真、テキストなどが、学生個人がもともと抱いていた想いや記憶と重ね合わされ、そこに新たな別の（教員の意図とは別の）意味が見出される。教員が提示した資料（「固有の場」）を期待された読み方からはずれた読み方、すなわち、学生の興味関心にもとづいた読み方、過去の記憶と現在が交差するところに新たな意味を見出すことをうながす読み方（聴講のし方）がなされうるのである。このような読みの実践も、いわば「密猟」の類に属するものである。私たちは、日常のさまざまな場面（「固有の場」）のなかを自由に駆けめぐり自分の目的に合うようにその資源を使う（読む）のである。

反芻する牛

つぎに、われわれが取りあげた「読者は旅人」につづくテーマとして、「反芻する牛」の比喩であらわされる概念について検討を行う。先に吟味していた図式は、「作家／読者」の対比において、「読者」の自由な読み方に焦点を合わせてきた。「テキストに固有の場」を支配する作家に対して、その与えられた「場」を駆けめぐり、時間（時機、好機）をうまく用いることによって「密猟」をはたらく遊牧民としての読者像の前景化をこころみてきた。それは、「場所／時間」というように分節される世界観に立脚した、作家や読者がそれぞれ依拠するものが、前者は「場所」（＝作家の領地）であり、後者は「時間」（＝読者のいとなみ）なのである。さて、「反芻する牛」のテキストでは、「読む」という行為そのものについて、さらに深く立ち入って検討される。そこで対照的に示されるのは、「黙読／音読」であり、身体的な感覚でいえば、「視覚／聴覚」の対比である。ここでは、「場所／時間」と「視覚（黙読）／聴覚（音読）」の分節を並べ置き、それぞれの項に照応関係が見出される可能性について吟味してみる。すなわち、「場所」＝「視覚（黙読）」の関係が成り立ち、同様に、「時間」＝「聴覚（音読）」の関係が成立しうるかどうかにについて考えてみることにする。

このような問題をあつかうに当たり、参照するテキスト（テーマは「反芻する牛」）は、イヴァン・イリノチ著『テキストのぶどう畑で』のなかから取り出されたものである。話の内容は12世紀の修道士（サン・ヴィクトールのユグ 1096-1141）にかんするものである。その時代は、書物の読み方において聴覚から視覚へと移行する過渡期でもあった。グーテンベルクによって活版印刷術が発明されたのは15世紀（1450年頃）であり、このあとの宗教的改革（16世紀）や科学革命（17世紀）を招来した、と通例みなされている。ここで検討される12世紀の修道院における読書習慣の変化は、グーテンベルクにさかのぼること3世紀前の出来事である。そこでは、いわば写本の時代において、書物の読み方についての変容がすでに起きていたことが明示的に語られている。以下、イヴァン・イリイチ著『テキストのぶどう畑で』からのテキストを示す（p. 54、下線は中西による）。

この時代に読書しながら瞑想する修道士は、しばしば反芻する牛にたとえられた。聖ベルナルは友である修道士に次のように忠告を与えている。「あなたは食物を反芻する正真正銘の動物になりきらなくてはなりません。そうすれば書かれたものは、『知恵ある者の口の中に、好ましい財宝がとどまる』（『箴言』二一、一二）という状態になることでしょう。『雅歌』の言葉についてベルナルはこうも言っている。「その言葉の甘美さを楽しみなさい。私はそれをくり返し、くり返し噛むのです。すると私の体中の器官は

識字の世界とオラルの世界における思考様式の相違

新しい力を得て、腹は満ち足り、全身の骨が賞賛の叫びを上げるのです」。

書物を視覚的に読む読者にとって、この過去の証言は強烈な印象を与えることだろう。このような読者はいかなる意味においても、声に出して読む時の響きを作り出すあの体験を、過去の人々と共有することはできない。しかもその上、香りとおいを表現する語彙は枯渇し、萎縮してしまったのである。

今日のわれわれは、書物を静かに読む（黙読する）、つまり視覚的に読むのが一般的である。特別な場面を除いて、われわれは、声を出して読む（音読する）というような読み方はしないものである。ところが、12世紀初頭においては、食物を反芻する牛のように、言葉の甘美さを享受しながら、くり返しくり返し声に出して（同時に、それを聴きながら）読むことによって、体の中の諸器官にパワーを与え、精神の力がみなぎってくるという発想があった。それは、身体と精神は別物ではなく、むしろ密接に関連し、統合されたものという見立てにもとづいている。ここで牛を登場させているのは、牛の食べ方と修道士の読み方とのあいだの類比に依っている。牛はエサである飼料をゆっくり噛みながら、一度のみこんだ食物をふたたび口の中にもどして噛みなおす、という牛の食の特性からたとえられている。ゆっくり噛みしめるという様子は、読書でいえば、文字をたくさん読んだり、速く読んだりするのではなく、ゆっくりと、少ない文字でもよいから、くり返し、くり返し読んで味わう行為を想起させる。一回読んだら終りではなく、もう一度もどって同じくだりをゆっくりくり返し読む。ある箇所という言葉の響きがとても心地よいから（美しいから）味わう。味わうというのは、まさに、音の響き、すなわち、声に出して読んだときに耳に入った（あるいは体の中を伝わって聴覚が刺激された）響きが、「心地良いなあ」と感じて、その感覚が体の中に入っていく。それが、血となり肉となる。つまり、音読される文字は、牛にとっての飼料と同じように体にとっての栄養素なのであり、心に栄養を与えるだけにとどまらない。それは、読書によって精神と身体両方に栄養が与えられ、充実してくるという発想である。「健全なる精神は健全なる身体に宿る」という格言の反対のいい方は、反転して、「健全なる身体は健全なる精神に宿る」といいうることも暗示している。

飼料／建築材料

つぎに検討を加えるのは、12世紀の修道士、サン・ヴィクトールのユグの前後における読み物としての対象物である書物のとらえ方にかんするテキストである。引きつづいて、イリイチのテキストを引いてみる（p. 114、下線は中西による）。

変化を受けたり、拡大したりしたのは、十二世紀のラテン〈著作集 corpus〉ではなかった。ユグとその同時代人たちは、依然として自分たちが古代キリスト教時代と異教時代から遺されているすべての書物を知り尽くしているという認識の下で、仕事に取り組んでいた。暗黒の中世をラテン語ではなくアラビア語で生き延びた古代の著作者は、パリのユグたちの手元にある翻訳本にはまだ登場してはいなかったのである。ユグの弟子の時代になっても、著名な著作者はユグが彼らに払う尊敬に従って評価されていた。しかし新しい秩序立ての道具の登場とともに、古典は単なる写本だとか、改訂版だとかいう扱いはされなくなった。十二世紀後期の著述家たちは、それらの書物を新しいやり方で消化したのだった。これらの書物は、もはや彼らが瞑想しながら反芻するための飼料として存在するのではなく、新しい学問体系を模索するための建築材料として用いられるようになったのである。

ロンバルドゥスの、ローマ皇帝グラティアヌスの、そしてベネディクト会の手になる『標準注釈』は、キリスト教〈著作集〉を単に再度整理するという従来の目的に沿ってに過ぎない。それに対して、索引を編み出した人々、すなわち今や圧倒的多数を占めるようになった新しい説教集団に属する人々は、この〈著作集〉からあらかじめ必要とされる「内容」を引き出し、要点と項目をまとめて、神学体系の構築者である学者、説教者、法律家の使い易い形に作り上げることに懸命だった。

12世紀前半まで、すなわちユグの時代までは、書物は、著述家あるいは読み手にとって、「瞑想しながら反芻するための飼料」として存在していた。書物を読むことによって、声に出して読むことによって、まさに、そうすることによって食物から栄養分を摂取するがごとく、読書を通じて身心ともにきたえていたのである。それに対して、ユグ以降（12世紀半ば以後）においては、書物は、いわば、「新しい学問体系を構築するための建築材料」として位置づけられた。読者にとって、もはや書物はみずからの精神の修養のためにあるのではなく、書物が示す、その書かれている内容そのものに価値が見出されていった。重要なのは、精神が豊かになることではなく、情報や知識に当たる内容を手に入れることであった。そののち、書物全体のテキストを分割して断片化したり、テキストは全体を構成するための要素に還元され得る、という考え方が広まってくる。書物は、もはや、知識、材料といった、それらを積み上げることによって学問体系の全体を構築するための（建築）「材料」になっていったのである。われわれの研究上の態度は、書物を「飼料」として読む（反芻する、味わう）といういとなみを、書物をアカデミックな体系の「建築材料」として読む（知識などを

利用する) というとなみの両者において、どちらが優れているのかという評価を下すことでない。音読によってつかわれる精神の豊かさや、知恵(知識ではなく)といったものが体得されることを目指すような読書習慣がかつてあったことを自覚すべきであり、今日においても、われわれは、そのオラルの豊饒な世界に対してもっと目をむけてもよいだろう。

現代のわれわれは、読むことにおいて、書物を視覚的に読んでしまう、黙読してしまうのであり、飼葉のように反芻する牛のように食べ物飼葉のように読まない。そういう読み方をもう忘れてしまっている。そのような豊かな読み方があるのに、そういう読み方には目もくれないでどんどん情報化社会のなかで、「素早く情報は処理されるべき」という考えのもとに、情報リテラシーが語られる場合も散見される。ネットの画面は一応スクロールというはあるけれども、巻物状にはなっていない。そこには瞬間的な検索機能がそなわっている。まさにコデックス版の進化系がインターネットの検索機能であるといえる(電子辞書も然り)。百科事典も一回のこころみで目的のページに到達できる。寄り道しないのでとりつけるのである。紙の百科事典ではそうはいかない。一回の捲りによって、目的のページに行くことはまれで、近辺のページ行ってしまい、しばし他の項目が視野に入ってくる。目的の事項の周辺が見えることは、ある意味では良いことでもある。該当箇所の前後の記載のほうがおもしろいことがある。結果的に知識がひろがる契機にもなり得る。書店も同様である。ブラウジングするなかで、目的の本棚の近くをふと見てみると、そちらの方が興味深いことがあることを発見したりする。ところがピンポイントとでネットで購入するようならばあいにはそうはいかない、という例が挙げられよう。

多弁的なオラルの世界

つぎに検討することは、声の文化の特徴の一つとして「冗長(多弁的)であることについてである。ヴァルター・J・オング著『声の文化と文字の文化』のテキストを以下引いてみる(p. 88、下線は中西による)。

思考には、ある種の連続性が必要である。書くことは、精神のそとに「ひとすじ line」の連続性をつくりだし、それをテキストのなかにとどめる。たとえ注意が散漫になって、いま読んでいる内容の文脈がよくわからなくなったり、その文脈自体を忘れてしまっても、拾い読みでそのテキストをざっと読み返せば文脈は回復できる。あともしりするのは、まったくその場かぎりのことであり、純粹に「当座の ad hoc」ことである。精神は、前に進むことにエネルギーを集中すればよい。なぜなら、あともしりするさきの当のものは、精神のそとに静止していて、文字の書き込ま

れたページの上にもいつでも利用できるようにひかえている断片なのだから、口頭での話しにおいては、状況はちがっている。精神のそとにあって、そこにあともどりできる場所など、どこにもない。なぜなら、口頭の発話は、発せられるやいなや消えてしまうからである。それゆえ精神は、それまで論じてきたことがらから注意をそらさないようにしながら、いつそうゆっくりとまえに進まなければならない。冗長な言いまわし、つまり、直前に言われたことのくりかえしは、話し手と聞き手の両方を、話の本すじからはずれないようにしっかりと引きとどめておくのである。冗長な言いまわしは、声の文化における思考と話しの特徴であるということから、そうした言いまわしは、むだのない、すじが通った言いまわしより、ある深い意味で、分析的な思考と話しは、人工的な作品であり、書くという技術によって組み立てられたものである。冗長な言いまわしをある程度除去するためには、ある時間的なまわり道になる技術、つまり、書くという技術が必要である。

「思考には、ある種の連続性が必要である」。連続性がないと、とりとめもない、思考になってしまう。思考には「流れ」が必要である。こうだからこうだから。A→B→C→D…AからB、BからCへ、そしてCからDへ…のような連続的な流れが思考(話し)には必要であるということをも確認しておく。その中で、「書くことは、精神のそとに「ひとすじ line」の連続性をつくりだし、それをテキストのなかにとどめる」。とにかく連続性というものが必要である。「書くこと」に関しては、書いては当人の精神の外側に「ひとすじ」の連続性を用意して、それをテキストのなかに入れておくことができる。いわゆる外部メモリであり、ノートとかメモ帳などである。自分の頭の中に直接入れこむことはしないけれども、外部メモリに書いておく。だから頭の中に入れておかなくてもいつでも利用することができる。外に記録しておけばよい(書くこと)。たとえ、どういふ話だったのかを分からなくなっても、書いているときに元にもどったりして、文脈の流れに入り直すことができる。これは、ある意味では分析的な思考が行なわれるということである。もう一つの「口頭での話し」では、連続性をどこで担保するのか、話している当人の外側に留めておく場所はない。「ひとすじ」の連続性を保つために、ゆっくり進んで、同じことをくり返したりする必要がある。自分のアタマだけが頼り(カンニングペーパーでもない限り)である。スピーチをしたり面接試験をうけたりするときに、ある程度、話しの流れが必要である。「ひとすじ」の流れ、思考や話しの連続性というものが必要である。Aを言ったらBを言おう、BのあとにCを言おう、といった流れさえおさえておけばまとまった話しをすることができる。その「ひとすじ」の連続性を保つために、どうしたらよいかという

識字の世界とオラルの世界における思考様式の相違

と、ゆっくり進んでいって、同じことをくり返して言ったりする必要はある。相手も、その話を聞いている。同じような内容の話しをとときき行なって言ったりする。一回言ったから分かったというふうには仲々いかず、もう一ぺん同じことを話したりしてそのようにして話しのラインからはずれないようにしてしゃべっている。ある意味で文章化されたものというものは、人文系の本については、パラフラフライティングにおいても、同じことがくり返し違った単語、ちがった表現で表現される。それは、冗長、多弁的な性格を帯びたものになっている。ここで利用した本はすべて多弁的である。多弁的であるからこの本はこんなに厚いのである。エッセンスや項目だけならばうんと薄い本になってしまう。ある意味で「語り」的である。語っているように書かれている。だからくり返しがあつたりするのである。そして、口頭での話しにおいては、くり返しをしたり、たくさんしゃべったりして、今自分もこうやって多くしゃべっている。

オラルの世界＝声による思考

『ドストエフスキーの詩学』の著者、ミハイル・バフチンはドストエフスキーの小説において、「思想を対話として展開」している、と見たてている。ドストエフスキーは、<視点>とか<意識>、あるいは、<声>といったものを介して、つまり、声によって思考している、と説かれる。したがって、「声」の文化の思考形式を探求するうえで、ぜひとも参照しなければならぬテキストである (p. 190、下線は中西による)。

あえて逆説的に言えば、ドストエフスキーは思想によって思考したのではなく、視点、意識、声によって思考したのである。彼は一つ一つの思想を把握し定式化する際に、そこに一人の人間の全体が表現され、その声が響き、そしてそのことによって彼の世界観の一部始終が、集約的な形で反映されるように努めた。人間精神の志向を自らの内に集約したこのような思想のみを、彼は自らの芸術的世界観の構成要素としたのである。こうした思想は彼にとって分割不能な一つの単位であり、そしてそのような単位から構成されるものは、すでに事者的に統一されたシステムではなく、人間の志向と声によって織りなされる具体的な事件である。ドストエフスキーにおいては二つの思想はすでに二人の人物を意味する。なぜなら誰のものでもない思想など存在せず、思想はそれぞれ一人の人間の全体を代表しているからである。思想をそれぞれ個人の一貫した立場と捉え、肉声によって思考しようとするドストエフスキーのこの傾向は、彼の社会評論の構造にさえ、はっきりと現れている。思想を展開する彼の手法は、どんな場合にも一定である。彼は思想を対話として展開してゆくが、それは無

味乾燥な論理的対話の形ではなく、それぞれに一貫した、深く個人的な色合いを持った声同士を対比するという形で行なわれるのである。論争的な論文においてさえ、彼はそもそも相手を読得しようとするよりも、複数の声の間を調整し、それぞれの意味的志向を調整しようとするのであって、多くの場合それは一種の想像上の対話という形式をとる。

この引用部から三点が抽出され得る。一つには、「個人的な色合いを持った声同士を対比する」ということ。声同士の対比というのは、例えばAさんの声<主語>、Bさんの声<主語>、Cさんの声<主語>、それぞれが思想である。思想は声として現われるのである。それらは(ABC)は対立したりする。対立したり対比したりする。二つ目は、「複数の声の間を調整する」複数の声というのは、モノログではなくてダイアログであることを示している。モノログ的というのは独話的、ある一人の権威ある著者がいわば一方的に語るというものであり、読者は著者の意図をくみとるように読むことが求められる。ドストエフスキーは、そのようなやり方をとらない。むしろ複数の声で語らせる。複数の声の登場人物によって語らせておいて、テキストの中に声が響き合っている。なぜ、声の響きがわかるかということ、それに向かいあう読み手が存在するからであるとされる。物質としての本(作品)のままだと声はひびいていない。しかし、その本を聞いて読者が読むという行為をするから本が響きわたるのである。だから、AさんBさんCさん…という複数の声が響きわたっているというのは、声を出して読むから分かるのである。別の言い方をすれば、それは読み手との対話ということもできる。AさんBさんCさんの対話のように見えて、実際のところ、読み手もそこには参加している。ということになる。三つ目は、「想像上の対話の形式をとる」という点であるそれは、作り話として想像上の対話としてすすめられる。思想(イデオ)というものは対話として展開されてゆく(それは、ある種、プラトンの対話集のテキストの如くである)。

これまで、オラルの世界の思考様式について、セルトー、イリイチ、オング、バフチンのそれぞれのテキストをめぐって検討してきた。本稿の主題として、「声の文化」における思考のしかたが、いかにして、矛盾なるものを並置することをゆるす思考形態と密接に関連しあうのか、について議論を展開していくことであった。そこで、前半部において、「読者は旅人」(セルトー)、「反芻する牛」(イリイチ)、「多弁的な表現」(オング)、「声による思考」(バフチン)といった、ジャンルを超えたさまざまな観点から、オラルの思考様式について抽出して素描してきた。後半部では、さらに同じ主題に沿いながら、異なったテキストを提示し、オラルの世界の特性についての概観をこころみる。最初に検討するのは、ミシェル・ド・セルトー著『日常実践

のポイエティック』のなかのテキストにあって、住居の位置の説明のしかたとして、「地図型／順路型」に分けて論じられている箇所である (pp245-246、下線は中西による)。

地図型思考／順路型思考

住んでいる家のことを話したり、通りのことを語ってきかせたり、人びとが場所を目にするときの叙述は、膨大な第一次資料体をなしている。C・リンダとW・レーボウは、ニューヨークの住居者たちが自分の住んでいる住宅についてどのような語りかたをするか、その叙述を綿密に分析しているが、そこからかれらは二つのタイプをとりだして、ひとつを「地図」(map) とよび、もうひとつを「順路」(tour) とよんでいる。前者は「台所のとなりに、娘たちの部屋があります」といったタイプのも、後者は、「右のほうに曲がると居間になっています」というタイプのものである。ところでニューヨークの住民という一資料体のなかで、「地図」型に属しているのは三パーセントにすぎない。あとののこり、つまりはほとんど全員は、「小さなドアから入って」、等々といった「順路」型であるこうした叙述は大部分がなんらかの操作をあらわす語からなっており、「ひとつひとつの部屋にどう入っていったらいいか」を指しめしている。この第二のタイプについて、二人の著者は次のように指摘している。すなわち、一順回、ないし「順路」は、「各部屋にいたる進路の最小系列をしめす」一スピーチ・アクト(発話行為)にあたるということ。そしてまた、「進路」(path)とは諸単位の系列化であって、「静的」(「右側に」、「正面に」、等々)か、「動的」(「左に曲がれば」等々)か、いずれかのかたちをとっているということである。

言いかえれば、叙述は二選択のどちらかにかたまっている。すなわち、見る(場所の秩序の認識)か、それとも、行く(空間をうみだす行為)かのいずれかである。図であらわすか(……「があります」)、または動きを組織するか(「入って行って、通りぬけ、曲がってゆくと」……)、この二つのうち、ニューヨークの住民たちの語りかたは、圧倒的多数が第二のタイプを選んでいる。

ニューヨークの居住者の住んでいる住宅の位置語り方には、「地図型」と「順路」型がある。「地図」型は3%しかいない。それに対して大多数は「順路」型ということである。先ほどみた、作家／読者の対比において、作家の数は少なく、読者は圧倒的に多い。そういうことと類比することはできないか。作家あるいは設計者(多数は、建物の使用者)、たとえば都市の立案者、それに対して実際に街を歩く人たち、利用する人たち書物であるなら、それを実際に読む人、この関係に似ていないだろうか。

そのような読み方ができるのではないか。「地図」型においては、「台所のとなりに、娘たちの部屋があります」、英語でいえば、There is (are)・・・、それに対して多数をしめる「順路」型におけるものの言い方(ものの言い方というのは思考の仕方に相応)では、「右のほうに曲がると居間になっています」、という言い方がされる。そして、もう一つの対比の型として、「見る」/「行く」の区分がされる。「見る」というのは、場所の秩序の認識、例えば、都市を設計した人の意図の秩序というものがある。この場所の秩序を確認というかたちをとる(視覚的であり、図面によって表わすことが可能)それに対して大多数の人は「行く」というパターンをとる。空間を生み出す行為、これは口頭による語りである。「見る」における秩序は視覚的であり、図面によって表わされることが可能である。だから、場所を示すときに目的地の場所を言い表わすときに、友人にどのように説明するのか山内さんは山田さんどこかで会うとき説明するときに、「…銀行の…支店の面側にあるお店です」というのか、「…通りを過ぎて左を曲がってすぐ右へ行くと分かるよ」というのかどちらかである。右脳が順路型(感覚的)、左脳が地図型(分析的)上から見る東とか西とかいう人は地図型、右か左とかいう人は順路型、このことから、つぎのような連関を考えることはできないか。つまり、roll型が順路型、冊子的が地図型、rollは順々に行くしかできない、一気に飛べない、上から見ることはできない。上から見ると、全体が瞬時に分かり確定された位置を正確に言うことができる。これに関連するものとしてイリイチのテキストに行く。

書物＝＜冒頭句＞を表玄関にかかげた回廊

つぎに検討するのは、ふたたび、サン・ヴィクトールのユーグの読書スタイルにかんするテキストである(イヴァン・イリイチ『テキストのぶどう畑で』p.104、下線は中西による)。ユーグまでの修道院の読者にとっての書物は、＜冒頭句＞を表玄関にかかげた「回廊」のようなもの、つまり長くつづくかりくねった廊下のようなものである、という比喻について考える。

一方ユーグの時代の人々にとって、書物とは＜冒頭句＞を表玄関にかかげた回廊のようなものである。仮に本の中のある一節を見たいと考え、飛ばし読みをしても、自分の捜している一節に出くわす可能性はほとんどない。行きあたりばつりにページを開くのと、たいして違わない。しかしユーグの時代を過ぎると、本をどこから読み始めても、目的とする内容に行きあたる可能性が増す。書物は依然として印刷物ではなく写本ではあるが、読書技術的な面からはすでに本質的に異なったものとなっている。話の流れはいくつかの段落に分断され、その段落の集合体が、今や新

しい書物を作り上げるのだった。

このことがどのような意味を持っていたかは、われわれ多くの者に身近な経験をもとにして説明することができる。一九七〇年代の末までは、録音された音楽をくり返して聞くことは可能であっても、ある特定の一節を選び出すための確実で手軽な方法はなかった。しかし一九八〇年代の末になると、経過時間を計測する装置はもとより、再生箇所や場所を表わすための数字の表示がオーディオ装置の標準仕様となった。修道院の読者にとって書物とは、古い録音装置と同じように、ひたすらたどってゆくことはできても、自分の知りたい箇所をそこからひよいとすくい上げることのできる代物ではなかった。ある特定の箇所を簡単に探り出すことが一般的なやり方となったのは、実にユーグ以後のことなのである。

この回廊においては、順々に進んで行くことしかできない。ところが、ユーグ以降は、書物は段落の集合体としてとらえられ始める。書物は一つ一つのパラグラフ単位に分断することができるものになる。その場合、目的とする箇所に容易にたどりつくことができる工夫がされるようになる。この回式と同様の対比がオーディオ装置においてなされている。すなわち、1970年代末までの録音テープ（音楽など）において、曲は、一曲ずつ順々に再生されてそれらを聴きつづける仕組みになっていた。1980年代末には、電子ファイル化されたMDなどでは聴きたい曲に一気にとんで行くことができるようになった。これは、書物でいえばcodex版、冊子版に相当するものである。巻物状、ロール状の形式は、一見すると原始的に思われるけれどもそちらの方が知恵がある、という発想、これはけっしてロール版をばかにしているわけではなく、むしろロール版のほうが豊かであるということを言おうとしている。現代人はロール版、巻物のようなものは読まない。さっさと検索したり、ネットで検索したり、たちどころに行く、煩雑な手続きを経ないで目的の箇所に簡単に行くことができる。このことは便利なようでその人の肉とか血にならない。食物と同じように味わいながらゆっくりといただく、そうすると栄養が体の中にしみこんでいく（サブリンのようなものに頼らないで）。ゆっくり口の中に入ったものをかみしめて食道を通して胃の中に入って消化されていく。つまり、勉強したりすることは時間がかかるということを示唆している。10分や20分で分かってしまうことはありえない。通年の授業のように、春、夏、秋、冬という季節の移り変わりを感じながら、時間をかけて勉強することは大事である。このような、書物は回廊であるという比喻と、「順路」型の居住地の語り方とを並べ比較してみると興味深い。「地図」型、つまり、codex版の書物において、目的地にたちどころに到達することができる。また、それを知ることができるのである。

読むという活動＝目の旅

ふたたびセルトーにもどって、「読むことは漂流すること」といった主題について考える（『日常実践のポイエティック』p334、下線は中西による）。

読むという活動は、ページを横切って迂回しながら漂流をする。テキストを変貌させつつ、その歪んだ像をつくりだす目の旅だ。何かふとした語に会うと想像の空を駆け、瞑想の空を駆ける。軍隊さながら活字が整理している本の表面でひよいと空間をまたぎこえる。つかの間の舞踏—こうした活動をたどって分析してゆくと、少なくとも第一に浮かびあがってくることは、読むことのできるテキスト（本、イメージ、等々）と読むことを分けへだてるような区分などがつづがたいということである。新聞だろうとブルースだろうと、テキストはそれを読む者がいなければ意味をなさない。テキストは読み手とともに変化してゆく。テキストは、自分のあずかりしらぬ知覚のコードにしたがって秩序づけられるのである。テキストは読み手という外部との関係を結んではじめてテキストとなり、二種類の「期待」が組み合わされてできあがる共犯と策略のゲームによってはじめてテキストになるのだ。つまりひとつは読みうる空間（字義性）が組織する期待であり、もうひとつは、作品の実現化に必要な歩み（読むこと）が組織する期待である。

これは「読者は旅人」と同様のことを語っている。「読むことのできるテキストを読むことを分けへだてるような区分けなどがつづがない」とは、「テキスト/読むこと」は一体化しており、それぞれを独立したエレメントとして分断することはできないということである。つまり、テキストはそれ自体では意味をなさず、読み手がいて初めて、テキストはテキストとしての生命が与えられるのである。「テキスト」と「読むこと」は切っても切りはなすことができない概念であることを示唆している。「読むという行動は、ページを横切って迂回しながら漂流する」と表わされているように、読者は旅人のように一直線に目的地（目的の箇所）には行かないということである。回廊の中で迂回しながら、ゆっくりゆっくり近づいたり後退したりするような「反芻する牛」と同じいとなみを指している。ぶらぶらするという。テキストを変貌させつつとは、自分なりの解釈を行うということである。プリコラージュする、例えば借家の部屋の模様替えをする（アバルトマンのところにも言及）。これも、ある種の密猟のあらわれである。「テキストを変貌させる」という密猟である。再生産の一つのかたちである。消費者のようで

生産者である。作り変えてしまう。「その歪んだ像をつくりだす目の旅だ」。それは旅人としての読書人のことである。「何かふとした話に出会うと想像の空を駆け、瞑想の空を駆ける」のである。自由にあちらこちらへと現像をしていく。「軍隊さながら活字が整列している本の表面でひょいと空間をまたぎこえる。」軍隊さながら、というのは、カチッと書かれてしまっているということ。作者とか出版社とかこのようにカチッと決めて書かれているということ。それを「ひょいと空間をまたぎこえる」、カチツとしているようであるけれど自由に遊んでしまうということである。それは「場」をもたない漂流であるから「つかの間の舞踏」なのである。自分の固定点を持たず、あるのはチャンス（好機、時機）であり、場所をもたない代わりに時間があるのである。与えられている資源は時間のみであり、時機、タイミングをうかがい、密漁できそうなところをつねにうかがっているのである。それに対して、支配者側の方は、領地がある。そこに読み手が入っていきその土地の中を自由に駆けめぐり、つまり、自分の都合に合わせて自由に解釈を行っていくのである。大学も、大学の設置者、大学の理念、大学の目的があつてキャンパスという領地が用意される。学生は其中で自由にうごき回るのである。大学の諸ポリシー（AP、CP、DP）があるにあっても、学生は自分のいいように好きなように、その資源の中でいわば密漁行為をしていくのである。都市空間における大型モールなども企業が商業活動を意図をもって展開するが、おとずれる人はそれを自分にいいように利用する。夏季は、エアコンの効いた心地よい場として家にいる代わりにそこで涼んでいる。散歩の空間として利用したりする。しかし、元々はそのような使用を理想としては作られているとは言いがたい。つまり、制作者の意図しない利用の仕方、空間のある種のブリエージュであり、その中でしたたかに密漁を行っているのである。社会の出来事とテキストの出来事を類比することができる。社会の出来事を言葉の世界に還元して考える。また、そこでは社会の中の矛盾は言葉の中にビルト・インされているという考え方である。

読書：旅／観光客の行動

引きつづき、イリイチの『テキストのぶどう畑で』のテキストについて吟味する。読書というものを、行く当てもさだかではない「旅」としてとらえるのか、それとも、行程が決められている観光客による「旅行」としてみるのかの違いをきわめたせた比喩について論じられている（p. 120、下線は中西による）。

そして最後に、十三世紀以前の書物の挿絵には、実際的な役割—現代では忘れ去られてしまっていることの多い記憶のための役割—が付与されている。ユーグは読書を旅に

たとえる。彼は、自らの肉体をページからページへと進める。文字の列を縁どる装飾が、言葉をこの旅の風景の中にはめ込むのである。読者に同じ風景を暗示するような文章は二つとない。似たようなページも二枚とない。同じように彩色された頭文字の「A」も二つと見あたらない。葉飾りとグロテスク模様とが文章と相まって、記憶力を増強するのだった。これらは、道中できりひろげられた会話を思い起こす風景であつて、読者はこれらの類推から〈書物の声 *voces paginarum*〉の記憶を呼び戻すのである。近代の読書、特に学究的あるいは専門的なそれは、通勤者や観光客の行動に相当する。それは、もはや徒歩の旅や巡礼の旅ではない。車のスピードと道の単調さと注意力を散漫にする広告群は、ドライバーの感性を喪失させる。この状態は、彼がオフィスのデスクにたどり着くやいなや、マニュアルや雑誌に目を通す時にも続いている。観光客がカメラを携えているのと同じように、現代の濁世はゼロックスの所に行き、記念の一枚をコピーする。写真、イラストそして図表は、輝く文字からなる風景の記憶を、旅人の手の届かない所へと追いやってしまう。彼らはそのような世界の住人である。

近代の読書は、通勤者や観光客の行動と同じであり、それに対して、ユーグの時代の読書（オラルの世界）は、旅である。通勤者や観光客の行動はあらかじめ定められている。通勤において、今日とはっさの会社へ行こうかなとか、どこで道草をくって会社までたどりつこうか、とは一般には考えられないことであり、定まった経路と交通手段によって出勤するのである。また、この場合の観光客とは、ツアーの観光客のことであり決められた日程・行程にしたがって一つ一つの観光スポットを巡っていくのであり、自由な気ままな旅とは対照的である。これがユーグの時代の読書のかたちである。いま、読むことを旅にたとえた。近代の読書においては、体験したもの、あるいは考察すべきものを、安直に視覚化してしまうのである。例えば、カメラをたずさえている観光客が、景勝地などを撮影して記録して収めてしまう。図書館の本をコピーする。イラスト、図など一目で見えて分かる。これが近代における読書である。ところが、ユーグの時代の読書は、文章（これは音読されるものであるという前提がある）のほかに飾りやグロテスクな模様（これは視覚的なものであるが）によって想像力が喚起されるのである。それは、絵本のようなものであるとおいえる。絵本は、たしかに目に訴えるものではあるけれども、何か（声）が響いており、声に出して読みはしないのである。そのところの記憶が出てくる。その場合における詳細な記憶、それは図とか表などの視覚的な媒体ではおさめられないものである。一から順番に回廊の中を進んでいって十までたどりついてようやく全体像が分

識字の世界とオラルの世界における思考様式の相違

かるといような思考形式である。そのような旅人のようなゆっくりと歩んでゆく（あるいは漂流する）読者に対して、近代の読者は、自分の都合のよいところだけを取ってしまうことを可能にしている。映画でいうと、劇場で観る映画は、当然のごとく初めから順々に観てゆかなければならない。それに対して、DVD で自宅で鑑賞する場合、必ずしも、初めから映画の再生を回していかなければならないということはない。好きな場面を探して観たり、チャプター一覧をみて、スキップして観ることがそもそも物理的に可能である。しかし、一見して面倒に見えるが、最初から一步一步踏みしめながら進んでいくことが面倒でやっかいなことであるというようにとらえるのではなく、トータルでいろいろなことが分かると同時に状況を包括する知恵が分かる。単発的な情報、知識といったものを取得することができても知恵は身につかない。単発的ないとなみでは知恵に到達しないのである。ネット（スマホ）では、情報を得ることはできても知恵を得ることはできない、ということである。断片的な知識はすぐにこぼれ落ちてしまい、血となり、肉とならない。飼葉を反芻する牛のように、ゆっくりとかみしめていく、つまり、旅人のように漂流しながら（流浪しながら）、順々にあるいは回り道しながら進んでいかないかぎり、知恵というものは身につかないということを示唆している。

推敲（文字）／言いつくろい（声）

つぎにオングのテキスト（『声の文化と文字の文化』 pp. 216-217）において、いったん書いたもの、あるいは、声に出して発せられたことを修正する方法について、論じられている箇所を引用して検討をくわえていきたい。

書くことにおいて、不整合を除き（Goody 1977, pp. 49-50）、推敲〔反省的な選別〕によってことばをえらぶことを可能にするのは、グディの言う「うしろ向きの通覧」（Goody 1977, p. 128）ができるからである。そうした推敲により、思考とことばには〔ものごとを〕区別する新たな力が与えられる。〔それに対し〕声の文化においては、ことばの〔流暢な〕流れと、それに対応する思考の奔流、つまり、古典古代からルネサンスにいたるヨーロッパの修辞家たちが「コピア〔多弁〕」と呼びなれわしてきたものが、話しに不整合があっても、それを言いつくろう gloss over ことによってなんとかしのいでしまうことが多い。gloss の語源は、「グロッサ glossa」つまり舌〔あるいは、ことば〕であるから、「言いつくろう」ということは、つまり「舌でまるめる tongue over 〔ことばであおう〕」というのである。書くことにおいては、いったん「発話」されたことば、つまり、外部に出され、紙面に書きつけられたことばは、除いたり、消したり、変更したりできる。〔しかし〕口頭の演じ語り

においては、こうしたことはできない。つまり、話されたことばを消すことはできない。なぜなら、訂正することは、不都合な言いかたや言いまちがいを取り除くことではなく、否定や言いつくろい patchwork によってそれらを補うことにすぎないからである。ブリコラージュ〔器用仕事、まにあわせ仕事〕ないし、はぎあわせ仕事 patchwork は、レヴィ＝ストロースが、「原始的」ないし「野生」の思考の型の特徴と考えているものだが（Levi-Strauss 1966, 1970）、ここで見るように、口頭で話すことによって生じる認識状況にもとづくものと見ることもできる。口頭の演じ語りにおいては、訂正はふつう逆効果になり、話し手の信用を落としてしまうことが多い。だから、訂正は最小限にとどめるか、まったくやらないほうがいい。〔それに対し〕書くことにおいては、訂正は非常に大きな効果を生むことができる。なぜなら、そもそも訂正がなされたことすら、読者は知りようがないからである。

「書くこと」と「口頭の演じ語り」、との対比において、書くことは、推敲が可能である。つまり加筆、削除などの修正ができるのであるが、話している人は推敲をすることは事実上不可能である。一度話されたことばを消すことはできない。他方、書くことにおいては、何回もの書き直しが可能である。つまり、「書くこと」においては、紙面にいったん書きつけられた、ことばは、修正したり消したりすることができるのである。「口頭の演じ語り」では、推敲はできない、一度話されたことばを取り消すことはできないのであり、したがって、話しに不整合があった場合にはどのように対処するのか。その場合、話された言葉を「言いつくろう」ことによってしのぐことになる。その際、思考の流れに沿うように多弁的になって、話したことの言いつくろいをすることになるのである。話をしているとき、違和感を覚えたとしても、そこで立ち止まることはできなく、前に進まざる（話を進める）をえない。前進しながら少しずつ修正しながら話しを進めていく。当然のことながら、多くを話すことになる。一方、書くことにおける「推敲により、思考とことばには〔ものごとを〕区別する新たな力が与えられる」とあるが、この「新たな力を」とは推敲を通じて、一度書いたものを変更したり消したりして、当初のテキストと、区別する力が与えられるのである。ここでは、「書くこと」と「話すこと」のそれぞれの特徴について論じられているのであって、どちらかの方が優れているということまでは言っていない。推敲に相当するいとなみをオラルの世界においても実践されていることが描かれている。先ほど取りあげた、読むことと語ることに、「読む」という行為でいわゆる密猟をやる、自由に動く旅人であるか、「語る」方も自由度があり、行き当たりばったりにかんしてやる知恵が動員される。さまざまな情報や知恵をフルに活用

して話すためには知恵が必要であり、それはそれなりに頭を使うのである。推敲の方だけが知的なものとみえるというわけでもないのである。セルトーの方は、あまり音読を意識していないけれども、つまり、「目の旅」というのは黙読ではあるけれども、自由な動きというものが連想される。イリノチの『テキストのぶどう畑』においては、12世紀における書物（写本）に対する読み方に関することが書かれているものであるが、音声的なものが前景化され、視覚的なものとしての対比において議論されている。

反アフォリズム的なオラルの世界

最後に、再度バフチンのテキストを取りあげる。ここでは、オラルの世界：においては、反アフォリズム的な表現を志向している、という所論について考えてみることにする（『ドストエフスキーの詩学』 pp. 196-197、下線は中西による）。

この点で特徴的なのは、ドストエフスキーの作品に、いわゆる金言とか格言とかアフォリズムといった、本来の文脈を外れ肉声から切り離されて非個人的な形をとってもその意味的な価値を失われないような、単体としての思想や命題や公式がまったく存在しないことである。これに比べてトルストイ、トゥルゲーネフ、バルザックその他の小説からは、このように単体として意味を持つ思想をいくらかでも抽出することができる（そしてよく抽出されている）。それらはそこで人物の発話の中にも作者の発話の中にもちりばめられているが、肉声を離れてもその非個人的なアフォリズムとしての意義を完全に保つことができるのである。

古典主義や啓蒙主義期の文学作品においては、一種特別なタイプのアフォリズム的思考形態、すなわちそもそもの発想からして作品のコンテクストから自由な、個別的に完結した自足的な思想による思考の形態が開発された。そしてロマン主義者たちはまた別のタイプのアフォリズム的思考を生み出した。そうした思考形態はとりわけドストエフスキーにとって無縁であり、敵視すべきものであった。彼の形式構成的世界観は非個人的な真実を知らないし、彼の作品には抽出可能な非個人的な真実は存在しない。彼の作品に存在するのは一貫した分割不能な声としてのイデオ、声としての視点であり、それらを作品の対話の織物から切り取れば、その本性を歪めてしまうことになるのだ。

「アフォリズム的な思考形態」というむずかしい概念がでている。格言とか、ことわざ、全言といったもの、これらは、文脈なしに、「ゆっくり急げ」とかいうように、単体としての思想や、文脈から切りはなされた命題自体に存在価値が見出されるのである。それは、個別的に完結している、すなわち、一定の意味

をもっているのである。一目で分かる、という意味である種、視覚にうったえるものでもある。一方、「ドストエフスキーの思考形態」は、文脈重視である。それは、文脈から、決して切りはなされることのない、声としてのイデオ（思想）、声としての視点によって思考する実践である。対話の文脈の中にあって初めて意味する実践である。対話の文脈の中にあて初めて意味をもつものである。したがって、単発的に金言、ことわざ等を差し出すようなことはしないのである。集約的なエッセンスだけを切りとって提示するようなやり方をしないのである。書物には可視的なエッセンス的なものは見当たらず、長いものである。冊子版において、写本、昔の本は大きな本であり多くのことが書かれている。ところが、15世紀、16世紀には、もっと簡便なもの、格言とかアフォリズム的なものが流行するのである。古代ギリシア、ローマの知恵を格言としてまとめられたりする（エラスムスなど）。卷子本を最初から順を追って音読していくことは大変な労力と時間を要する。より広範な読書層のひろがりが見られるような時代において、知恵に到達するためのより簡便な方法が求められていくのである。エッセンスを所望するニーズが高まっていく。古典の思想文字などの翻訳が（ギリシア語からラテン語に）進んでいくにしたがって人文主義の到来をみることになり、さらにはドイツ語、フランス語、英語などの記事が出て一般の人（それでも限られた人びと）にも読めるようになっていく。それとともに、いわゆるダイジェスト版のような、比較的簡便に内容を把握することができる書物の需要が高まっていくのであった。世界の事象について、より明瞭に知りたい、つまり図版や絵のような媒体を通じて解説的なものが加えられると、いっそう分かりやすくなり、その種の多くの本が求められるようになってくる（その一例がコメニウスの『世界図絵』である）。それは一種の百科事典としての機能をもつ。世界は一体どのようになっていくのかを探求したいと思う心、知識に欲がそれによりさらに高まっていく。かつての写本時代においては、すぐれて触覚性に富んでいた。写本はぶ厚く重く、手で持った時の感触やページを開く時の指の感覚など、音読という声や耳を刺激することだけでなく、読むことには五感の多くが動員されていたといえる。（表紙の美しさ、あるいはグロテスクな模様など視覚にうったえる要素も多分にあった）。現代人における、「読むこと」のいとなみは、五感へのより少ない負荷によって成立するようなテクノロジーの発達にもなっていない。

おわりに

本稿は、今後、別稿として順々に展開していく予定の七つの章の第一章に位置づけられる。すべての章に通底する全体的な主題として、オラルの世界の思考様式と、矛盾や対立する概念

識字の世界とオラルの世界における思考様式の相違

を並べ置くことを通じて推論を行う思考様式との親和性を問うことを掲げていた。また、その企ては、科学／魔術の対立図式にひそむ「科学」の優越性を相対化することも含意している（現代における、われわれの思考の閉塞性を直観していることが研究動機の背景にある）。本論では、初めのころみとして、「読者は旅人」という主題を立てることによって、いくつかのテキストをもとに解釈を行い、ひとつの思考空間を切り拓いてきた。結論的なことをみちびいて収斂していくことは、当初から目論まれず、四人の著者の諸テキストを出発点として、その解釈行為を基盤にしながら、全体主題（オラルの世界＝矛盾並置）について考えつづける実践こそ、われわれの研究の真の目的とするところである。この意味で、本稿で綴られたことは、あらたな出発のテキストとして、次章以降に向けての議論の契機となるであろう。

引用文献

- イリイチ、イヴァン（1995）岡部佳世訳『テキストのぶどう畑で』法政大学出版局。
- オング、ヴァルター・J（1991）桜井直文他訳『声の文化と文字の文化』藤原書店。
- セルトー、ミシェル・ド（1987）山田登世子訳『日常実践のポイエティック』国文社。
- バフチン、ミハイル・M（1995）望月哲男、鈴木淳一訳『ドストエフスキーの詩学』筑摩書房。

（提出日 平成 29 年 1 月 10 日）